

新人紹介

2026年4月に迎えました新入社員を紹介します。

* 原 沙織 *

はじめまして。本年度からワイルドライフマネジメント事業部計画策定支援室に配属となりました、原沙織です。よろしくお願いします。出身は群馬県です。趣味は多岐にわたり、キャンプや旅行を楽しむ一方で、家ではアニメ鑑賞のほか、toconoma や MONO NO AWARE といったバンドの曲を聞いて過ごすことも好きです。また食べることも好きで、最近はスリランカカレーにハマっています。

小学生の頃は外出が嫌いで、飽きもせず YouTube を見る日々を過ごしていました。そんな時、保護犬を飼うことになりました。元野犬だったからか散歩が大好きで、一緒に行っているうちに私も外に出ることが楽しくなりました。振り返ってみるとここがターニングポイントだったと思います。学生時代、周囲の環境や人間関係に思い悩む時期もありましたが、生物を学び、資源を無駄にせず循環させる生態系の中でなら自分も誰かの生きる糧になれるのかもしれないと、生態系が心の拠り所になっていきました。

そして生態系について、憧れの北海道の地で学びたいと思い帯広畜産大学へ進学しました。1年次は農畜産について、2年次から配属された環境生態学ユニットでは樹洞調査や、構内のフランスギクの分布を画像の位置情報からマッピングしたりなど、広く浅く分野横断的な実習と授業があったため、視野を広げる良い機会になりました。特に、農業では生産性と環境負荷のバランスを考えているにもかかわらず野生動物の影響で収量が低下するため、中には野生動物なんて絶滅すればいいとまで考える人がいるという話を聞き、野生動物被害の深刻さを痛感しました。研究室配属は目指していた野生動物研の人气が高く自分の成績では入れないだろうと悟り、野生動物とは別で興味

のあった IT 技術やリモートセンシングを活用していた草地生態学研究室に入りました。ゼミの先生に生態系について研究したいと相談したところシステムダイナミクスモデルを教えていただき、卒論ではこのモデルを用いて気温や降水量などの気象条件が牧草成長に与える影響について研究しました。はじめは気象と牧草なんて生態系らしくないと感じていましたが、勉強するほどわからないことが増え、管理されている採草地ですら理解できないのかと、自分の非力さと生態系の複雑さを思い知りました。大学院に進学し卒論をさらに深めることも考えましたが、野生動物の現状を正しく知り、野生動物と人との仲介者になりたいという気持ちが強くなりました。それだけに業界の中でも特に信頼の厚い WMO の一員になれたことを、大変光栄に思うと同時に、身の引き締まる思いです。未熟者ですが一日でも早く戦力となれるよう誠心誠意努めてまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



カレーを食べるためにスリランカへ行きました。クジャクやセイロンヤケイなど様々な野鳥にも出会えました。

* 生川 敏希 *

はじめまして。本年度よりワイルドライフマネジメント事業部関東支社に配属になりました、生川敏希と申します。よろしくお願いいたします。趣味はゲームとテニス、自然観察です。プロテニスのハイライトチェックが日課で、同い年のセバスチャン・コルダ選手が好きです。座右の銘は「失意泰然、得意淡然」です。

私は長野県に生まれ、高校卒業まで地元で過ごしました。比較的市街地の近くで生活していたため、普段の生活で野生動物を身近に感じることは多くありませんでしたが、テニスの大会中、コートにサルが出現するという事件もありました。進路選択の迫る高校2年生、私は好きな生物にかかわる仕事ができたら楽しいだろうと漠然と考えるようになりました。その頃、飼っていた猫を交通事故で亡くし、最後まで診ていただいたかかりつけ医の獣医師を格好いいと思ったこと、生物、特に動物の生理・生態に対する知的好奇心を満たしてくれそうだという期待から、獣医学を学べる大学への進学を目指しました。

岐阜大学に進学した2020年、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生しました。低学年の頃は慣れない環境で苦勞もありましたが、幸いにも志を同じくする友人に恵まれ、たくさんの方にお世話になりながら、無事に学位を取得することができました。4年生から卒業までの3年間は、獣医学科ではまれな、野生動物を扱う研究室に所属していました。獣医学科以外に所属する学生も院生として受け入れを行っており、貴重な経験ができそうだと感じたため、当研究室への配属を希望しました。私は野生イノシシを標的とする避妊ワクチンの開発に向けた基礎研究を担当し、主に分子生物学的な実験を行う傍ら、院生のカメラトラップ調査に同行させていただいたり、僅かばかり画像解析のお手伝いをしたり、野生動物管理・調査のインターンに参加させていただいたり、フィールドワークを含む様々な貴重な経験をさせていただきました。

私は大学内で地域猫活動を行う団体に所属していましたが、いわゆるネコ問題と野生動物問題には共通する部分が多くあると感じています。お恥ずかしながら、私は大学に入学するまで、ネコに餌やりをするとどのような問題が生じるかについて考えたことがありませんでした。また、世の中にはネコが嫌いな人がいること、ノラネコやノネコによる様々な問題が生じていること、シカやイノシシなど一部の野生鳥獣がここ数十年で増えてきたこと、野生動物と人のあいだで軋轢が生じていることなどを、全く知りませんでした。野生動物管理学は、私に新たな知識と考え方のヒントを多く提示してくれた学問です。簡単ではありませんが、この分野を通じて、少しでも人と動物と環境のより良い未来に貢献したい思いを持っていたことが、入社決め手です。かわいそうという思いそのものを、決して頭ごなしに否定することのないよう、気をつけたいです。また、将来的に地元である長野県や、ネコ問題にも何かしらの形でかかわれたら嬉しいです。

現場は未経験のことが多く、ご迷惑をおかけすること、至らないことなどあるかと思います。少しでも皆様とよりよい仕事ができるよう、日々精進いたしますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



大学の近くを流れる伊自良川の風景。カモやサギ、カワウなどが見られる。大学内でもアオサギやカワセミを見ることができた。(2024年2月、筆者撮影)

* 大石 圭太 *

初めまして。本年度からワイルドライフマネジメント事業部関東支社に配属となりました、大石圭太です。私の出身は、静岡県牧之原市（旧榛原町）の中でも特に田舎で、私にとって自然は特別なものではなく、ごく身近な存在でした。小学校の頃から森に入ってカブトムシやクワガタを捕ったり、川でザリガニやカメを捕って飼育したりしていました。しかし、世界にはこうした自然が急速に失われている場所もあると知ったことで環境問題に興味を持ち、鹿児島大学農学部生物環境学科に進学しました。大学では森林性野ネズミのアカネズミ（写真1）とヒメネズミを研究し始め、気づけば博士課程に進学して学位を取得するまで、とことん野ネズミの研究に勤しんでいました。学位取得後は神奈川県自然環境保全センターの特別研究員として、県が推進している良質な水資源確保のために森林を整備する事業に携わりました。その事業での私の役割は、森林整備で下草や低木が育った健全な森林が、哺乳類の生息にとっても適した環境であるかを検証することでした。ここでも野ネズミを調査させてもらい、その成果は国際誌に論文が掲載されました（色々な方のご指導の賜物です）。その他、センサーカメラによる中大型哺乳類のモニタリング調査も担当しており、こうした行政の研究機関での経験は WMO でも大いに活かせると考えています。神奈川県には7年間お世話になり、県の事業ともかかわりの深い



写真1. 谷川岳山頂のアカネズミ
（プライベートの登山でたまたま遭遇）

WMOを上司に紹介していただいた縁で応募に至りました。

WMOに辿り着くまでに様々な道を歩んできましたが、その道筋は大学時代の研究を通して生物同士の関わり合いを学んだことが原点となったと思います。「ネズミ」と聞くと、街中のゴミ捨て場や下水道にいる不衛生な姿や、農作物・樹木を食害する不快なイメージを持たれる人もいるかもしれませんが、ネズミの世界も奥が深く、森林性野ネズミのアカネズミとヒメネズミについては害獣としての報告はほとんどありません。むしろ、森林生態系の中で非常に重要な役割を担っています。彼らは、秋に大量に落ちるドングリを運び、冬の餌不足に備えて埋めて隠します。このような行動を「貯食」と呼び、これにはドングリ側にもメリットがあります。運ばれたドングリが運よく食べられずに生き残った場合、親木から離れた場所で発芽・定着することができるため、親との競争回避や分布拡大につながります。このように、多様な生き物が複雑に関わり合いながら大自然は成り立ち、私たちに感動を与えてくれています。

しかし、時に生態系は様々な要因でバランスを崩します。その一例に増え過ぎたシカの問題があります。ニホンジカが増えた原因は、過去の狩猟制限や狩猟者の減少、暖冬化など様々な要因が指摘されています。シカは大食漢で、時には口の届く範囲の草や樹木の葉をほとんど全て食べて尽くしてしまいます。その結果、草や低木を生息場所や餌にしている生き物が減り、生物多様性が失われてしまいます。また、植物の被覆がなくなった土壌がむき出しの地面に大雨が降ると土砂崩れの危険が高まるといった側面もあります。このような状態から生態系のバランスを取り戻すためには、人間が介入して適切に管理（マネージメント）する必要があります。また、人口減少時代を迎えた日本では、相対的に野生動物の勢力が増し、農耕地や街中への出没はこれからますます増えていくことが予想されます。実際、私の実家周辺でも、

タヌキやアナグマ(写真2)、イノシシなどの野生動物を見かける機会が、私の幼少の頃より確実に増えました。このような時代に野生動物と人間が健全に共存する社会を築くため、野生動物のプロ集団である我々WMOの役割はますます重要になっていくでしょう。このような職務において、これまでの大学や行政の研究機関で培った経験を生かし、貢献できるよう尽力して参ります。まだまだスキル不足で、学ばなければいけないことが山ほどありますが、何卒よろしく願いいたします。



写真2. 実家の庭に堂々と現れたアナグマ

* 森好 水希 *

初めまして。本年度よりワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属になりました森好水希(もりよしみずき)と申します。

趣味は音楽、アニメ、漫画など。特に1年ほど前からDTM(パソコンでの音楽制作)を始め、作詞・作曲・編曲を鋭意勉強中です。一番好きなのは歌うことで、ボーカルとしての活動も始めました。楽器は全くと言っていいほどできませんが、楽器含め音楽の話も色々できると嬉しいです。

生物は物心ついた時から好きでした。普段山や川で遊ぶことはあまりなかったものの、家の周りで昆虫やカエルをとったり、旅行ついでに高速道路のサービスエリアでクワガタムシを探したりしていました。小学生のころから、何かしら野生動物関係の仕事をしたいと思っていました。

本格的にフィールドに出始めたのは大学に入ってからです。獣医学部に野生動物学教室があるこ

と、そして大自然への憧れから、北海道大学を選びました。入学してすぐに北大ヒグマ研究グループ(クマ研)というサークルに出会い、卒業までクマ研が生活の中心となりました。実際に山に入り、本やテレビでしか見たことのなかった生き物を見るのはファンタジーが現実になっていくような感覚でした。ヒグマに限らずシカ、キツネ、タヌキ、鳥、昆虫など様々な生き物やその痕跡を見ることができ、ヒグマの調査に関連してシカや植物などの調査をすることもありました。紙地図とコンパスを頼りに道無き山に行くのは冒険感があり、山歩きそのものも楽しくなりました。2年生と4年生のときに大雪山での調査の隊長を務め、ヒグマの行動観察や新しい調査地の模索などを行いました。調査の企画・運営はとても大変でしたが、誰よりも長い時間ヒグマを観察することができ様々な発見がありました。

卒論ではヒグマの腸管内寄生虫をテーマとしました。知床ルシャ地区でヒグマの糞を集めて虫卵検査を行い、どのような寄生虫がどの時期に多いのかを調べました。ルシャのクマはクマ研で感じてきたクマ像とは大きく違い(食性、人やほかのクマとの距離感など)、環境に適応する動物の複雑さと面白さを感じました。また、この時期に市街地へのヒグマの大量出沒があり、人と野生動物の付き合い方についても考えさせられました。

卒業後1年はEnVision環境保全事務所でバイトをしました。ヒグマのヘアトラップ調査、札幌市街地での出沒対応、シカの捕獲事業などを行いました。大学では主に動物の生態にフォーカスした調査・研究を行ってききましたが、管理・対策という観点から野生動物の現場に触れ、新たな視点を得ることができました。

WMOではクマだけでなく様々な動物にかかわり、野生動物についてもっと広く知りたいです。また、「人と野生動物の共存」は可能なのか、どのような形でそれを目指すべきなのかを考えていきたいです。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

* 松尾 寛 *

はじめまして、本年4月からワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属になりました松尾寛と申します。この場をお借りし、自己紹介をさせていただきます。

好きな野生動物はマガモ、趣味は狩猟と釣りです。好きな釣り針はケン付流線 11 号です。年のせいか最近ルアーを使った釣りが忙しく感じてしまい、投釣やカゴ釣りなど、竿を地面に置いてのんびりできる釣りばかりするようになってしまいました。

出身は福岡県北九州市で、市内でも特に工場が集中した、野生動物との接点が全くない町で育ちました。その反動か幼少期から自然に対する興味関心が強く、大学では理学部で生物学を専攻し、修士課程まで、両生類を対象に被食者―捕食者相互作用に関して研究を行っていました。

修士課程修了後は、とある県庁にて8年ほど勤務し、商工、林業、鳥獣保護管理や福祉などを担当してきました。様々な分野の業務を担当する中で、鳥獣保護管理に特に魅力を感じ、より専門的に携わりたいと考え、この度中途採用という形で転職に至りました。

以上の経歴のとおり、大学等で鳥類・哺乳類について学んだ経験が少ないため、野生鳥獣そのものに関する知識についてはまだまだ勉強途中となります。今後、勤務の中で経験を積み、一日も早く一人前になることができるよう努力したいと考えております。

一方、行政職員として勤務する中で、個人や企業、自治体など“人”に働きかける経験は比較的多かったように思います。鳥獣保護管理を担当していた際も、農林業被害を受けている集落住民や捕獲の担い手である狩猟者と直接お話をする機会も多く、時に厳しいご意見・ご要望をいただくこともあり、その度に人間生活と野生動物の関係性のなんと難しいことかと痛感する日々でした。それでも、市町村と連携しながら住民の皆様へ丁寧に聞き取りや説明を続け、その地域での対策が前進



マガモは骨まで大好きです

した実感が得られる機会もあり、そのような時に強いやりがいを感じていました。

WMOにおいても、これら“人”を相手とした業務経験を活かし、人間と野生動物双方に視線を向け、人と野生動物とのより良い関係性の構築に貢献することができれば幸いです。

民間企業での勤務自体が初めてのこととなりますので、わからないことばかりでご迷惑をおかけすることもあるかと思います。ご指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。

* プロシュ・フルール *

はじめまして。ワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属となりましたプロシュ・フルールと申します。名前の「フルール」はフランス語で「花」という意味です。趣味はダンスや旅行、美味しいものを食べることです。本日は、母国スイスから神戸に至るまでの私の歩みについてご紹介させていただきます。

もともと私は、野生動物のドキュメンタリーを見たり、毎年夏に海へ行ったりする中で、海洋哺乳類に興味を持つようになりました。しかし、スイスは海のない国であるため、海洋哺乳類を見る機会は動物園に限られるか、あるいは遠くまで旅行する必要がありました。どちらの場合も、動物

の側に負担をかける形で、自分だけが利益を得ている一方的な関係のように感じていました。そのため、今度は自分も動物のために何かをしたいと考え、母国のヌーシャテル大学で生物学を学ぶことを決意しました。中でも、フィールドワークの機会が多いことから、動物行動学を専門としました。

修士課程では、修論のためにイギリスに6か月間滞在し、ハイイロアザラシの母子関係について研究を行いました。そこで鰭脚類に強く惹かれるようになり、人と野生動物とのつながりの重要性についても学びました。修士課程修了後は、海洋哺乳類に関するフィールド経験が中心であったため、しばらくの間、職を見つけることができませんでした。やはり、スイスには海がありません。そのため、海のある国へ行くために、再びアカデミアの道に進むことを決意しました。

では、なぜ日本だったのでしょうか。

私が初めて日本文化に触れたのは、食べ物とアニメ映画『千と千尋の神隠し』がきっかけでした。子どもの頃、この作品の雰囲気がそれまでに見てきたものとは全く異なっており、とても魅了されたことを覚えています。成長するにつれて、漫画やアニメに親しむ中で、着物や茶道といった伝統文化にも関心を持つようになりました。現在は独

学で着付けを学んでいます。実際の日本を自分の目で見たいという思いから、修士課程修了後、1か月以上にわたる一人旅をしました。九州から北海道まで列車で縦断し、熊野古道も1週間かけて歩きました。この経験を通して、観光客として通り過ぎるだけではなく、日本での暮らしそのものをより深く知りたいと思うようになりました。そのため、博士課程の進学先を探す際、日本を第一志望とし、ご縁があつて北海道大学水産学部に入学することができました。

私の研究テーマは、トドと漁業者との関係に関するものでした。漁業者の方々と関わる中で、長期的な解決策を見出すためには、対立する双方の立場を理解することの重要性を強く実感しました。そして、このような考え方はWMOの中核的な価値観でもあると感じるとともに、人と野生動物が共存し、生態系の一員としてともに豊かに生きていける社会の実現に貢献したいと考えています。

日本語は母語ではなく、また陸上での調査に関してもまだ多くの点で未熟です。それでも、ようやく自分が心から居場所だと思える環境に出会えたと感じています。これから、日本語の習得を含め、この仕事に必要なスキルを身につけるために努力していきたいと考えています。周囲の方々より時間がかかることもあるかもしれませんが、少しずつでも着実に成長していきたいと思っています。



D 論発表の衣装



漁業者の船に乗せてもらった時



カナダで海生哺乳類のインターンシップをした時

本稿は英語で作成した原文をもとに、AIを活用して日本語に翻訳したものです。

* 岸田 鈴央 *

はじめまして。本年度よりワイルドライフマネジメント事業部広島事業所に配属となりました、岸田鈴央（きしだれお）と申します。出身は千葉県船橋市です。実家は動物園や水族館にアクセスしやすい環境にあり、物心ついた頃から生き物が好きでした。その影響もあり、幼少期から大学入学までは「動物園の飼育員」を志していました。そこから野生動物に関わりたいと考えるようになった転換点は、大学でのサークル活動にあります。

実家の周辺は畑の広がる環境で、タヌキやキジを見かけることはありましたが、大学に入るまでクマのような大型動物はどこか遠い存在でした。しかし、大学で「ツキノワグマ研究会」に入り、山での痕跡調査や堅果類の豊凶調査、外部のサル調査への参加といった活動を通して、野生動物や自然をより身近に感じるようになりました。また、リンゴ園での電気柵の手入れを手伝う中で、実際の食害を目の当たりにしたことや、市街地・大学構内への出没、さらには人身事故のニュースに触れた経験から、生き物への興味は単なる「憧れ」から「人と野生動物との衝突」という切実な問題意識へと変わっていきました。

もともとは希少種保全や動物の飼育を希望しており、動物園のインターンシップにも参加しましたが、そこで現場の実情を知り、同時にサークル活動で野生動物問題の最前線に触れたことで、より直接的な問題解決に関わりたいという思いが強くなりました。その後、環境省や野生動物調査会社のインターンシップを経験したことで、この業界で生きていく決意が固まりました。

大学院の修士論文では、自動撮影カメラを用いて、東北地方におけるアナグマの穴ごもり期間や繁殖期間の推定といった基本的な生活環の解明と、タヌキやハクビシンとの巣穴共有について調査していました。結果として方法に改善点が多く見つかり、自分では満足できない結果となってしまう

ましたが、その失敗を糧にするとともに、野外調査の経験を今後の業務にあたる上で役立てていければと考えています。

趣味はいろいろなことに手を出しており、アウトドアではキャンプや釣り、生き物の写真を撮ったりしています。



飛び立つエナガ。お気に入りの1枚です。

インドアな過ごし方も好きで、ゲームをしたり、コーヒーやウイスキーに少しこだわってみたりと、その時々興味に従って色々なことに取り組んでいます。また、レトロな喫茶店やバーの雰囲気が好きで、尾道は素敵なお店が多いので休日に開拓していきたいと思っています。



岩手の喫茶店にて。

配属先の広島はもちろんですが、出張などで訪れる可能性のある関東や関西の支社周辺でも、美味しいお店があればぜひ教えていただけると嬉しいです。

広島という新しい環境で、まずは一歩ずつ知識を蓄え、一日も早く業務に貢献できるよう努めてまいります。皆様、これからどうぞよろしくお願いいたします。

* 黒瀬 陽織 *

4月1日からワイルドライフマネジメント事業部広島事業所に配属となりました、黒瀬陽織（くろせ ひおり）と申します。

生まれが島根、実家は岡山です。大学は鳥取、配属は広島と、中国地方制覇まで後1県（山口）というところです。

私を一言でいうと、『好奇心の有り余る人見知り』です。

普段はなるべく普通にふるまうようにしているものの、実は一人でチェーン店のご飯屋さんに行くことさえ勇気がいるほどの人見知りです。テイクアウトはぎりぎり可……。大学生になってようやくコンビニに入れるようになったのが密かな自慢であるほどです。そんな私の好奇心が発揮されるのは、人間ではなく自然の方面でした。

物心ついたころから本を読むことが好きで、科学や文学に触れては目を輝かせていました（今もそう）。小さい頃はNewton 別冊がお気に入り。一方で外を駆け回ることも好きだったので、近くの公園の森でせっせと秘密基地を作ったり、野鳥を捕まえるわなを拵えたり（成功0）、そこから虫を捕まえカエルや亀を捕まえ、魚やいもりを捕まえ草やドングリを家に持って帰っては母の絶叫を聞いたりするのが日常でした。中高では一見おとなしく過ごしていましたが、好奇心は抑えきれず生物園芸部に写真部に美術部と何個も兼部、部長や会計すら別部で兼任し、挙句の果てには高校3年生で新しく文芸部に入部しコンクールに挑むほどです。

気になればなんにでも手を出してしまう性なので、化学も物理も地学もやりたいと言って分野を絞り切れず、大学は好きな科学を広く学べる環境分野に進学しました。循環型社会形成や自然環境保全を専攻し、特に森林生態系や生物間相互作用について関心を持って学んできました。アルバイトはペットショップの小動物アクア担当で、部活動はご多分に漏れず、ヤギ部や地球環境を考える

会などのサークルや委員会に複数所属していました。



Figure 1 バイト先のデグーたち



Figure 2 バイト先のシリケンイモリたち



Figure 3 ヤギ部のアズキちゃん

入社のきっかけである野生動物保護管理について考え出したのは大学1年生の秋頃です。

山川海の広域な環境保全や生物多様性について学ぶ中で、大本である山へ目を向けたのが始まり

でした。動物も植物もたくさんいるはずの山は、実は壊れかけの環境だと知ったのです。それでも未だ残るその魅力に惹かれて、現場で何が起きているのか、何が起きているのが正常なのかということの間近で感じたくて、まずは狩猟免許を取得しました。そこからは、毎日わなの見回りをしては大学・バイトへ行く日々。自分の中での『人見知り』の要素が慎重な観察力として化けました。知識を得て山に入って、また新しい知識を得て山に入る、というサイクルに見事ハマっていきます。時に処理を手伝っていただいたり時に講演会や協議会に呼んでいただいたりして、近隣農家の方や行政の担当者、地域住民の方々の懷に飛び込み、学生特権を大いに活用しながら被害対策・駆除・里山問題など趣味では収まらないほどの勉強を3年間積ませていただきました。この経験から野生動物と人間との軋轢の解消・保護管理に携わりたいと強く考え、この会社を選びました。



Figure 4 自力でさばいた猪肉

卒業研究では、下層植生が失われたニホンジカ高密度環境下に自動撮影カメラを設置して、彼らの日周行動パターンや利用強度を調べていました。かわいい顔していますよね。ちらりとカメラ視線になっているのを見て癒されていました。まだやり足りなくて、いつか自主研究したいなあ。という野望を秘めています。

以上のように私は生き物が大好きなのですが、命を見送ることも多くありました。被害を知っても何度駆除しても、目が白くなる彼らの頭を毎回撫でて見送るのは、私の中で省くことのできないルーティンです。お風呂や布団の中で泣いてしまうこともしばしば。それでも、この痛みは忘れずに持っていたい。殺したくて殺し、調査したい思いで捕まえるのは、作業の中身が管理や保護ではないと考えているからです。現場に立って、探して学んで、彼らと私たちにとって最も効果的かつ倫理的な管理手法を模索しお互いがよりよく過ごせるように、今後も知識や技術を蓄えて、WMOの一員として精一杯向き合ってまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



Figure 5 くくり罠で捕まえた鹿